カオダイ教団創設後（1928年）のお告げとその解析
――大道三期普度教団の組織の対立と教宗レェ・ヴァン・チュンの台頭――

髙　津　　茂

キーワード：カオダイ教，大道三期普度，コォ・ブット（機筆）停止命令，協天台と九重台の対立，カオ・クゥイン・クゥ聖座から追放事件

はじめに

本稿は，筆者が先に提出した「カオダイ教団創設期（1926年）のお告げとその解析―大道三期普度教団の創設―」・「カオダイ教団創設直後（1927年）のお告げとその解析―大道三期普度教団の組織等の基礎の確立―」[(1)]に続く一連の研究計画の一部を構成し，1928年に当るものである。それゆえ，カウ・コォ（cầu cơ求機）にしろコォ・ブット（Cơ bút機筆）にしろ降霊方法[(2)]等は別にして，降霊に際してはまず伺いたい神意についての問を奉り，その問いに対して降った神霊が霊媒に憑依して自動書記され，それを読み上げて記録されたものがお告げであり神意とされる。この神意を記録したものが聖言（Thánh Ngôn），すなわち神のお告げとしてカオダイ教の教えの基幹をなす。それゆえ，このお告げの内容こそが一次資料と言えるものと思う。

実際に各地の壇（đàn）[(3)]や個人宅の交霊会で同年に降されたお告げは，数百に上るものと想われるが，文書として記録され大道三期普度の名の下での刊行が許されている聖言資料はさほど多くない[(4)]。カオダイ教団創設後の道暦３年（1928）に出された日付を持つお告げは同時代に女性頭師（Nữ Đầu Sư）であったフゥオン・ヒィエウ（Hương Hiếu）（1887～1971）の『道史（ĐẠO SỬ）』（以下DSと略記する。）巻１（サイ・バン道史）が６件，巻１・２が７件の都合13件ある。同じく同時代に保法（Bảo pháp）グゥエン・チュン・ハウ氏（(Nguyễn Trung Hậu）や頭師タイ・ト・タン（Thái Thơ Thanh）や女性頭師フゥオン・ヒィエウの手書きの聖言にDSと『聖言協選（THÁNH NGÔN HIỆP TUYỂN）（以下TNと略記する。）』を加えて[(5)]賢才グゥエン・ヴァン・ホン（Hiền Tài Nguyễn Văn Hồng）が2002年に出した『聖言蒐集（THÁNH NGÔN SƯU TẬP）』（以下STと略す）巻１にも15件のお告げが記されている。さらにTN巻２だけで15件。加えて1928年当時には生まれていなかったグゥエン・ヴァン・ホン（1940～2005）が比較的網羅的に収集した『道史日記（ĐẠO SỬ NHỰT KÝ）（以下NKと略記する。）』だけで39件に上る。ところが，部分重複・全面重複を問わず重複が少なくない。例えばSTの内１件はDSと，13件はNKと重複している。STのみの1928年のお告げは１件しかない。他にも同じお告げを上記４種のどれかの資料と重複して記した事例が13件ある。このような状況とTNの五戒の禁について３件に分けて記してあるので，DSのお告げと纏めて１件として計算整理すると49件のお告げが確認できる。

本稿ではこの49件のお告げを対象としてカオダイ教団創設期直後の1928年の経緯とその解析を行うことを目的とする。それゆえ，道暦２年に当たる1927年には重複を除いて都合140件の

お告げがあったものが1927年６月１日のコォ・ブット停止命令以降1928年まで影響が及び，お告げの数は1/3強に激減した結果となっている。このことはコォ・ブットを停止せざるを得ない状況[6]となった1927年から28年にかけての経緯を踏まえて理解する必要があるものと思う。

コォ・ブットの乱立が，霊媒の専門集団である協天台の設置を招き，神の意を盾にする協天台に対する九重台職色の反感を招き，そこに聖座建設問題がからみ，信徒の修養は一向に進まない状況で1928年を迎えている。

なお，使用した史料について[7]は，同時代史料とされているが，全て大道三期普度の検閲を経たものであり，その点での史料上の限界がある[8]。本稿で利用した史料とその出典等については髙津 茂（2021）を参照されたい。

１　1928年の『道史』・『聖言蒐集』・『聖言協選』・『道史日記』資料の特徴について

(1) 内容別分類から見た史料の特徴

「教えの修養・教えの理念」についてのお告げは49件の史料の内17件，34.7％。「協天台と九重台の対立問題」は９件，18.4％。「聖座建設問題」は５件，10.2％。「コォ・ブット停止問題」は５件,10.2％。「戒律・経典」は５件，10.2％。「その他」は８件，16.3％。となっており，教えの修養や教えの理念がおよそ1/3強を占め，教団創設後の教えの修養が透徹できていない様子が窺える。加えて「協天台と九重台の対立問題」が２割弱となっており，およそ５回に１回は協力し合うようにとのお告げを降さねばならない状況にあった様子を窺わせる。次いでその他の16％を除いて「聖座建設問題」と「コォ・ブット停止問題」と「戒律・経典」がそれぞれ10.2％となっている。この内容からみても1928年当時では教団としての形式は整いつつも，未だ教えや組織運営といった内実が定着確立していなかったものと思われる。

(2) 月別の分類から見た史料の特徴

49件のお告げは，毎月平均して降された訳ではなく，１・５・７月の各６件を最大に４・６・10月が各５件，２・８・９・11月が各３件，３月が２件，12月が１件，不明が１件となっている。１月から７月までの７か月間で33件，67.3％を占めていることから，1928年も前年程ではないにしても前半に降霊が多かった。これは７月21日のコォ・ブット停止命令による影響が大きいものと想われる。

内容ごとに観れば,「教えの修養・教えの理念」は２・９・12月以外は年間を通して観られるが，８月以降はあっても３件なので，お告げという方法以外の教えの修養や教えの布教方法を採ったとも思われる。というのは，ファム・コン・タック（Phạm Công Tắc）の説法集『護法の演説文と説道』（1928-1940）（Diễn Văn & Thuyết Đạo của Đức Hộ Pháp）1928年３月５日（戊辰の年２月14日）の演説文で,「聖会とは何か？教えとは何か？五支 - 協天台 - 九重台 - 八卦台」を述べ, 同年11月28日には「大道の五支[9]」の題で講演をしているからである。

「協天台と九重台の対立問題」は２月，５・６月，９・10月が各２・３・４件のお告げが観られ，波動的である。

「聖座建設問題」は1927年からの懸案を引きずったもので，カオ・クィン・クゥ（Cao Quỳnh Cư）の病気の対応が中心をなす。これに関するお告げが降されたのも波状的であるが，９月１日のカオ上品（Cao Thượng Phẩm）タイニン聖座追放事件が当時の教えの混乱を象徴している。

「コォ・ブット停止問題」は１・２月の２件と６・７月の３件のみで，前半に集中している。

「戒律・経典」は３・６・８・12月と時期不詳で波状的である。

「その他」１月に２件，４・５月に都合２件，残り４件は７・８・９・11月と年度後半に多い。

(3) 史料別の分類から見た特徴

DSは13件のお告げの内８件,61.5%までが「教えの修養・教えの理念」に関するもので，次いで「協天台と九重台の対立問題」が２件,15.4%でこの２つの内容だけに３/４が集中している。この傾向がさらに顕著なのは，TNで15件のお告げの内10件，66.7%が「教えの修養・教えの理念」に関するもので，この内容に集中しているのが特徴的である。1928年の「教えの修養・教えの理念」に関するお告げは17件あるが，そのうち10件, 58.8%はTNによるものである。フゥオン・ヒィエウ女史は，同時代の運営当事者の一人として３件の回顧文と同女史の「小史」をDSに寄せている[10]。また，TNはタイニン聖座の出した「聖言」としての自主規制があったのか，組織対立や暴力的なカオ上品追放事件等には触れない編集方針を採っているように窺える。

STは1928年の13件のお告げのうち４件，30.8%が「協天台と九重台の対立問題」に，２件，15.4%が聖座建設問題に集中している。残り「教えの修養・教えの理念」と「その他」が各３件,23.1%となっている。STとNKは，同一人物グゥエン・ヴァン・ホンが史料を探して編集したため，傾向は似ているものの，特に「協天台と九重台の対立問題」には，NK39件のお告げの内９件，23.1%を占めるだけでなく，他の内容にも７～８割はNKに示されるお告げが記されている。特に９月以降のお告げ資料は「五戒の禁」を説いた１件のお告げを除いて全てNKに記されたお告げとなっている点で比較的に網羅的である。

2　教えの修養・教えの理念に関するお告げ

教えの修養や理念については，お告げの数も多く，紙幅の都合から全文を記すことはできない。要旨のみの指摘となる点を寛恕されたい。

① DSの戊辰の年の年頭に至尊が降したお告げは，「愛とはお互いに助け合い，喜びと悲しみを分かち合い，支えあうことです。」としたうえで，「魔王は，賃金のためにトラブルを起こすよう扇動しています。そこでは，憎しみを使って，自分を憎しみより一層高いものとするように示していませんか。お互いに何千もの新しい憎しみがあるからです。お互いに憎みあっているので，お互いに敵対しているのです。お互いに憎みあっているので，お互いを破壊するのです。しかし，お互いに危害を加えることは，世界を滅ぼす好機となります。ですから（憎みあうことを）禁じます。愛し合えないなら，お互いに憎みあえない。」と諭して，愛し合うことを説いている。教えの本質を愛とする点はキリスト教(聖教)の影響を窺わせる。

② NKの１月23日（戊辰の年１月１日）のお告げでは，師は各門弟が徳の精神を積み，教えに敬意を表するであろうとして，「各子供たちが聖なる教えの言葉から一日遠ざかっていれば，教えの歩みは一日混乱して不明瞭なものとなるでしょう。歩みの大小は明瞭ではなく，許可権限で品階に叙することもなく，多くの者が教えの関係を私利私欲のために利用しようとする。これでは，子供たちが日常生活の習俗から抜け出て，教えの結果がでるのは何時になるというのか。」と嘆き，「教えの心を持つ者は，自分よりも衆生を知るべきで，もし全ての師の門弟がこの修行をすることができるなら，教えは確立され，みんな苦しみから脱け出す道に手探りで入ることに，疲れることもあろうが，注意を向けるであろう。」とわずかの期待を寄せ，徳の精神を積むことを説いている。

③ TNの３月２日のお告げに閑陰道長（Nhàn Àm Đạo Trường）が降り，自分の美徳を育てたいと思うなら，誰にも見えない自分の心の中から始めるべきとして，「魂は燃料を満たしたランプのようなものですが，炎がなければ暗闇を照らすことはできません。ですから，目に見えなくともまず心を修めねばなりません。心を修めず外見だけに気を配っていると，式典で祈りを唱えるだけのようなものになる

からです。物理的な光は輝いていますが，心を照らす神の目はありません。あなたの儀式は空虚であり，悪と虚偽の空虚への道を開くだけです。理解しようとして下さい。そうでなければ，あなたの修錬は役に立たないでしょう。」と諭して，心を修めることを説いている。

④　ST・TN・NKに共通する４月２日（戊辰の年２月12日）のお告げでは，信徒である子供たちの責任に触れたうえで，「もし教えが成り立っていないなら，神聖な罰の部分は罪福を量ることで決定されるであろう。」と諭している。

「鬼王はあなた方の何人かの曲がった性質を利用して，私（至尊）と競争し，あなた方を誘惑して鬼王の側に引き寄せ，・・・正しい道から徐々に離していきました。私(至尊)があなた方の使命を保証し，あなた方の聖なる心を訓練したように，今こそ三教の座（Toà Tam Giáo）[11]があなた方の行動を正義に従って判断するときです。ああ！私（至尊）から離れて間もないころ，あなた方の多くは世俗的な欲望のために鬼王に誘惑されました。私は気の毒に思いますが，救うことはできません。正しい道を歩む人は誰でも私（至尊）の教えを聞く機会を得るでしょう。間違った道を歩む者は誰でも悪に導かれるでしょう。たまたま善悪を見分けることができるなら，私（至尊）とすべての生き物のために互いに導きあうべきです。」と諭して責任ある判断を求めている。

⑤　TNとNKの４月15日（戊辰の年２月25日）のお告げでは，最善を尽くして師の委託した任務である衆生を済度するよう努力することを改めて訴えている。「悲しい！何度あなた方の世話をするために苦しむ必要があるというのか。私の唯一の願いは，あなた方が私の聖なる美徳でお互いに愛し合うことです。無作為に不当に全ての仙人や仏陀の称号を称えることなどできません。私はあなた方が生き物を愛し，教えを広めることだけを期待してあなた方のために困難に耐えてきました。教えを成功させるための手段をあなた方が持てるように，私はあらゆる手段を用意しました。転生に苦しむすべての魂を導く力をあなた方に与えました。（中略）あなた方の美徳を少し改善するべきだと思いましたが，あなた方の多くは私を軽視し，私の子供たちをすべて１つの家族に集めるという私の命令に耳を貸さなかった。多くの子供たちが不平を言っています。このような状況下で教えはいつになったら成功するのでしょうか。」諭すというより泣き落としに近い師の嘆きが綴られており，当時の教団の状況と師の評価を推し量ることができる。また，カオダイ教でいう愛が家族愛に近いものと解し得る。

⑥　TNとDSの４月29日（戊辰の年３月10日）のお告げでは，「人生は試験のようなものです。簡単に合格できれば，その試験は価値がなく，意味もない。試験が難しくても，優等で試験に合格すれば，あなたの成功はより価値のあるものになります。この世界で一番大好きな子供たちですが，試験官として答えを教えてしまったら，あなたの合格なんて何の得にもならない。さらに，私はあなたから離れたことはありませんが，あなたが試験に合格する能力があることは分かっています。あなたが苦しみを負わなければならないという事実は，私の意志によるものです。貧しい家庭に生まれながらも美徳を持っていることは，他の人々の良い手本です。あなたは忍耐強くあるべきです，そうすればあなたの美徳は天国への梯子になるでしょう。誠実はあなたの修煉のためのものであり，美徳は金よりも貴いものです。貧乏であっても満足して道を修めれば，上層階級よりも優れた功績を収めることができます。」と説いている。４月15日の些か感情的なお告げから，２週間後の４月29日のお告げは至尊の自制心を感じさせ，清貧に甘んじても誠実で美徳に満ちた生

き方を促している。

⑦ TNの５月12日（戊辰の年３月23日）のタイン・タム（Thanh Tâm，清心）氏のお告げで「教えは広く普及しています。種がまかれてから２年が経ちますが，誠実な信奉者はまれです。これが釈迦牟尼仏の嘆きの理由です。」と記し，通りを歩いている人がいないと言ったのは「通りにはたくさんの人がいますが，良い人はいません。ただ歩いて死んでいて，空虚で，欺瞞的で，残酷な人々だけです。」とし，誰も畑を耕さないとは「心は畑に例えられ，田を耕して稲作の準備をする人がいないように，心を育む人もいない。耕作されずに放置された畑は，蛇，鼠，昆虫の領域になります。心を休ませて耕作していない人は害獣のようになります。田畑の準備はできています。種子と道具もそうです。後は人々が鋤を手に取り，収穫をもたらすために必要な作業を行うだけです。耕さなければ，つまり心を養わなければ，刈り取ることはできません。彼らは魂を失うでしょう！」と心の耕作を諭し促している。

⑧ DS・ST・NKの５月23日（戊辰の年４月６日）の南海観音如来（Nam Hải Quan Âm Như Lai）のお告げに，「職色（chức sắc）が誓いを立てることの重要さ」を説いている。すなわち「職色の誓いを立てるときは，心に偏見があってはならない。しかし，多くの職色の方は，例えば名誉職の職色のように誓いを立てるべきであるのに，そうではなく，教えの正しい法を交付もしない。これこそ教えの混乱を絶滅させるための基本です。」として職色が襟を正して誓いを立て直すよう諭している。

⑨ DSの５月31日（戊辰の年４月13日）にファム護法とカオ上品が行った扶鸞で，至尊はチュン（Lê Văn Trung）に語り掛けながら，「義務の欠如を恐れるよりも，道友自身の心を恐れています。これは政府が教えの動きを監視している中で，それを許可するのか，それともその監視を防ぐのかです。多くの人が自らの権利を利用して教えに混乱を引き起こすような振る舞いをしています。道友の修行をしっかりと守らなければ，必然的に教えに大きな騒動が起こり，そのために何千何万の生ける者が歩みを止めなければならなくなります。」と道友の修行をしっかり守らないと内部分裂の危機が起こる状況にあることを警告し，その上で「分裂と不和の種を蒔く者は，誰でも正しい教えに反する者です。」と教えられた。分裂と不和の種を蒔く者が誰かは記されていない。

⑩ DSの戊辰の年５月の日付を持つが日付不詳の護法と上品が行った扶鸞により降った太白（Thái Bạch）のお告げで，至尊は「子供たちが自分の責務を少しも分かっていないために，階級秩序と子供たちへ命令権を準備した。師は教えを行うために，師の律令と聖言を遵守するよう。」と言いつけた。すなわち，「多くの子供たちはあえて冒涜し，自分自身をはっきりと名乗ったうえで，謙虚さを維持することもせず，互いに危害を加える陰謀をめぐらしています。このことは神（Thần），聖人（Thánh），仙人（Tiên），仏（Phật）に対して罪を犯すことに他なりません。それゆえ，我が愛する聖女を守り，守り合うために，それぞれが互いに抑制し合う力を持つことを決意したのですが，誰も自分の尊厳をどう見るべきかも知らず，全世界を苦しめています。師が再びこの失望に苦しむことになったら，全世界は永遠に地獄に落ちなければならないでしょう。（中略）玉虚宮（Ngọc Hư Cung）[12]は常にあなたの功績と罪に注意を払っています。私はもう何も教えないと決心していますが，一つだけ言いたいのは，私の律法と聖言に従い，教えを実践することです。チュン，それもあなたのせいです。クゥ，タック，チュオンは，九重台のように協天台の権威を認識していません。そうすれば，安心して師の命令を待つことができます。いつ必要なのかも

わかります。ヒィエウは心配しないでください。子どもたちは師を忘れていないと思いました。」とある。信徒たちの心の耕作ができていないので階級秩序と子供たちへの命令権を導入したが，言ったことが聞けないようなら，もう師は何も教えないと決意したと悲痛な叫びにも似た言葉を記して，師の律法と聖言に従って教えを実践するよう説いている。また,「チュン, それもあなたのせい。」と言っていることは，チュンが教団運営の最高責任者と述べていることに等しい。また，クゥ，タック，チュオン[13]に協天台の権威を認識するよう述べていることは，1927年６月１日のコォ・ブット停止命令以降の協天台の職色が些か意気消沈していたものと窺え，逆に九重台の権威が比較的高い状況にあったことが知れる。

⑪　DSとTNの６月28日（戊辰の年５月11日）のお告げに,「至尊は，苦行に汚された心を浄化して白くするよう諭された」とあり,「あなたの禁欲はその（世俗の中で汚れた黒い砂糖を白くする）ようなものです。」としている。世に愛されるということは，世俗は穢れに満ちて人格を侵食し，物質に心奪われ，精神をないがしろにすることを意味していると解している。

⑫　TNとNKの７月18日（戊辰の年６月２日）のお告げに道教の達人とされる真極老師（Đức Chơn Cực Lão sư）が降り，教えの運命について教えています。すなわち,「教えに調和がない限り，人々は明確で熱烈な心で教えに励むのではなく，お互いを制御しようと努めます。弟子たちは貪欲で卑劣なままで，名誉と富に惹かれます。教えはそのような状況では成功できず，誰も自分の神聖な位置に戻る道を見つけることができません。あなたがた弟子は，共通の家の建設に協力する誠実さと決意を持った人々を見つけるために，選択を慎重に行う必要があります。（中略）一部の才能のない魂は，いまだに互いに争い，中傷し, 劣っていることを証明するだけです。愛から, 至尊は教えの種をまき, すべての人々が涅槃に航海するための舟を上陸させました。しかし，理解できない人がどうやって溺死から逃れることができるでしょうか?教えは人々の間の分離とともに悪化します。（中略）カウ・コォ（Cầu Kho）の交霊会で指示された儀式を使用してください。新しいものを発明しないでください。」と述べて，教えの目指すところを諭している。加えて儀式の在り方まで，混乱している様子を述べ,「儀式がこれらの指示と異なる寺院には参加しないでください。」とまで述べている。６月段階の聖霊の認識では信徒達が貪欲で卑劣なままで，名誉と富に惹かれているとの認識が一般化しており，儀式までが崩れ始めている様子を窺わせている。しかし，指示と異なる寺院とは具体的にどこの何という寺院かは記載がない。分派の兆とも解し得る。

⑬　TNとNKの７月20日（戊辰の年６月４日）に簫山道士（ĐứcTiêuSơnĐaoSĩ）のお告げで,「努力が無駄にならないように，足取りに注意しなさい。」とある。すなわち,「教えは多くの困難を通過したばかりです。しかし，それ（教え）はまだ絶滅の危機に瀕しています。努力が無駄にならないように，慎重に行動してください。自分を知り，教えを知る。状況を知り，人々を知る。自分の行動を調整するために，善悪の違いを知りなさい。人々はまだ徳を欠いているため，教えはまだ実現されていません。徳のある人は明確な展望を欠きがちです。知的な人々は敬虔さ，謙虚さ，誠実さを欠きがちです。全体として，人々は依然として富と名誉を切望しています。同じ道をせわしなく進み，同じ目的地に向かって突き進んではいますが，ほとんどの人は我を張ってお互いに屈しない。（中略）自分のことを考えたほうがいい。教えの信者は，教えの高位にある者が分離を引き起こしているのを目撃しました。これは邪悪な心の果実です。

奇跡的で貴重な組織である協天台は，一部の高位の職色の過ちにより役に立たなくなりました。教えが混乱しているのも不思議ではありません！協天台は，教えを支える基盤であるはずですが，もはや信頼できず，予見可能な将来にわたって教えを滅ぼします。世界は無意味な領域になりました。気をつけて！協天台は，すべてに対して最高の判断を下す至高の存在によって率いられています。協天台の高位の職色自身が注意を払っていないため，新しい法典にはまだまだ欠陥があります。この混沌とした状況は，九重台に力をもたらしました。」とある。この協天台の高位の職色をあからさまに批判することは，組織的な混乱を惹起するばかりでなく，聖言が教団内で共有される性格を鑑みるとき，組織的崩壊を促しているのは至尊が委任した聖霊[14]なのではとの疑義が生ずる。それにしても，過ちとは何のことで，過ちを犯した協天台の高位の職色とは誰の事であるのか。不詳である。

⑭　TNとDSの７月28日（戊辰の年６月12日）のチョロン（Chợ Lớn）におけるお告げで，至尊が，「子供たちは，目覚め，迷いに気づき，正しい道に戻るであろう。」と諭された。すなわち，「子供たちよ，あなた方の誠実さ，公平さ，謙虚さに感動するほど，名誉と富を追い求めている狡猾な裏切り者を地球から消し去りたいと思います。ああ！私はあなた方一人一人が目を覚まし，迷ったことに気づき，果てしない道を離れて正しい道に戻り，もう一度私に従うことを願って，あなた方の苦境について悩みました。（中略）私はあなた方一人一人に適した職位を事前に用意しました。災害はすぐに終わります。私があなた方に頼ることができるように，安心して平和に過ごしてください。私の神聖な権威は，それ自体のためではなく，あなた方全員を導くために留保されていることを理解してください。すべての生き物に降りかかる苦難に耐えるために，気高い心を持ちなさい。世俗的な生活は平凡で，一時的な魅力に満ちていますが，教えは永遠です。」と諭しているが，具体的にどのように門弟を指導するのかについては全く明らかでない。何を根拠にして子供たちが正しい道に戻るであろうと言えるのか，不詳だが，７月21日のコォ・ブット停止命令と関連があるのかを窺わせる。それにしても，名誉と富を追い求めている狡猾な裏切り者とは，誰を指すのかも不詳である。これまでの門弟や信徒に関する評価は何だったのか。教団内での混乱は，至尊自身が自らの失態を意味していることを理解していなかったということであろうか。神にしては自己理解や内省に欠けるように思える。どちらにしろ大きな転換を表明したお告げである。

⑮　TNの８月５日（戊辰の年６月19日）のカウ・ニィエム（Cầu Nhiếm）におけるお告げで，至尊は「教えは現在病気の状態にあり，誰もが個人の主権を楽しんでおり，あなた方と戦うのが好きです。」と告げている。すなわち，「教えは現在，悪性腫瘍の未診断の患者です。治療しなければ，病気は認識されずに内部から拡大し，患者の生涯にわたって致命的な力を発揮します。（中略）人々は外的な強さのオーラの背後で分裂しています。この分裂を正さなければ，滅びます。誰もが個人の主権を楽しむのが好きです。（中略）自主規制の技術を欠いており，傲慢で高い称号と名誉を渇望しており，人々を管理するために必要な美徳を持っていないのです。そのため敵意を生み出しています。この弱さを認識し，弟子たちが聖座に目を向けて祝福を祈るように，調和と協力を生み出す方法を見つけなければなりません。あなた方一人一人は，自分自身の憎しみをやめ，態度を正し，教育を受けた人々を大義に結集させ，人々に教えのかけがえのないものを認識させる責任があります。やがて，動揺は確実に少数から数百万人に拡散し，障害に直面しても弟子たちを導くことに影響を与えるでしょう。教えの普及が１日

遅れると，人々に１日害が及ぶことになります。一人一人が人を憎み続ければ教えは茶番となり，いつになったら完成するか知れません。教えが地球全体に広がるのはいつの事になるのでしょうか。内にまだ混乱を抱えているなら，どうやって外で調和を生み出すことができるのでしょうか。古来，人の心に反することは長続きしないことをあなた方はよく知っています。平和における協力の実践は，教えに適用される唯一の実践であるべきです。傲慢な人は仕えられることだけを望んでいます。彼らは社会の中で謙虚な人を気にしません。自らの王国を滅ぼす王たちです。会衆を組織することは，国を組織することと大差ありません。実際，あなたの義務と責任はより大きく，より困難です。教えの破壊を防ぐために，自分自身を正し，他の人と和解しなければなりません。人々の間に調和，協力，連帯，自由を創造します。これはこれまでで最も貴重な成果です。生き物への愛と皆さんの努力への共感から，会衆を悪化させるような心はありませんが，もし皆さんの中で誰も調和を作る責任を負おうとしないなら，人々の間の敵意は混乱を引き起こし，私の導きの努力を台無しにしてしまいます。あなた方が最初からそのようにすれば，あなた方は永遠に苦しみの海で溺れるでしょう。お互いを愛さなければ，数が多ければ多いほど，混乱，敵意，格差が生まれ，すべてが完全に役に立たなくなります。」と諭している。天の封じた職色にあてた内容にも読めるが，具体性に乏しい点では変わりがない。それにしても個人主義をはっきりと批判しており，神の内在化による信仰主体の確立という西欧キリスト教にみる個人主義を協調と調和の阻害要因としている点は，特徴的である。

⑯　NKの10月６日（戊辰の年８月23日）に頭師トゥオン・チュン・ニュット（Thượng Trung Nhựt）が教えを開く文書を打ち立てた日（丙寅の年８月23日）[15]を記念してグゥエン・ヴァン・トゥオンの家での２周年記念大会で教えを説いた。

⑰　ST・NKの11月15日（戊辰の年10月４日）に護法 - 上品が扶鸞を担当した降霊でのお告げで，師は「謙虚な行いと互いに愛し合うことを守って行くべき」と諭されている。すなわち，「主の聖霊によって互いに愛し合う方法を知っています。（中略）これからは謙虚に愛情を持ってお互いを愛し合う。これは師への非常に敬意を表する捧げ物です。」と諭しているが，これまでとロジックは変わりないし，具体性にかける。弟子や信徒の不徳を感情的に上から目線で嘆くものの，具体的な修養や修行，さらには教理の研修が組織化されるなどの教団内の日常的な修養活動が観られない。しかし，このことは，教団創設後の教えの理念が，精神的修養を重視する求道的なものであったことを意味している。この教えの求道的な理念と現実の信徒の修養の実態との乖離を埋める宗教的な対応が，後の瑤池宮宴会礼の秘法という大乗的救済[16]につながったものと思う。

3　協天台と九重台の対立問題に関するお告げ

教団運営，とりわけ至尊の子供たちを見守り，一人一人を導き，信徒の心の耕作や弟子に美徳を教え，法の定める宗教生活を行い，お互いに愛と信頼の集団となるよう整えるのは，教宗の責任であり，九重台の仕事と思われる。上述したような教えの修養が問題となるのは，九重台の運営が順調に進んでいないことを意味していると推われる。そのような状況は1927年２月11日のDS・NKの「性悪や鬼王の妨害」に関するお告げ[17]等から観られた。時を同じくしてTNの２月13日のお告げ[18]で協天台の霊的・世俗的権力に関し，お告げを用いることを諭して，「協天台は教えの神聖な権を握っている師がいる場所です。凡そ教えに関することは，協天台に関することである。」と協天台の九重台に対する優位性を明確にしたうえで，師が一般の人

たちへの指導に乗り出す。ただ，師の直接指導は教宗の権能に抵触するが，師の神聖な務めの一つでもあると諭している。このことから，協天台は師の名を語り運用が図られた可能性があり，組織上の対立の素になったと思われる。

以下，1928年のお告げから観ることとする。

① TN・ST・NKの２月19日（戊辰の年１月28日）李太白（Lý Thái Bạch）のお告げで，「誰かに称号が与えられた場合，その人はその称号のみを持ちます。同じ称号を持つ人は決して存在しない。」と教えている。すなわち，同じ称号を持つ者は二人いないとのことであるが，このようなお告げをあえて降さざるを得ないということは，同じ称号を降すコォ・ブットがあったか他の分派を構想する者が同じ称号を別の職色に付けようとしたことを窺わせる。

② ST・NKの２月27日（戊辰の年２月７日）のお告げで，「（前略）先に言いますが，タック！あなたはどれほど愚かですか？チュン！彼らの扱い方を知っていれば，彼らは来ません。玉虚宮に対して大変な罪です。」などとチュンやタックに語り掛けた。「ここからは，権利の使用を強制します。私に聞いてください！師の言葉を思い出してください。タック！法令を通過させるために護法の権利を利用するだけでよいのです。私は救う方法を持っています。多くの子供たちは，あなたの話に耳を傾けねばなりません。（中略）それぞれに十分な宗務行政の権限を与えます。チュン，タック！これからは何かを教えるような気持ちで仕事全体を処理するだけで，これ以上暴力的な作業は行わないでください。聞きたいことは何ですか？保法は護法の下にいます，従わせなさい。護法の独裁的行動について尋ねられ，護法の命に従わなければなりませんが，その後どうなるのでしょうか？それが負う部分，あなたは無実です。師に尋ねることを選択してください。」と述べている。言うまでもなくチュンは九重台の頭師レェ・ヴァン・チュンの事であり，タックは協天台の護法ファム・コン・タックの事であり，師が両台のトップに権限を行使するよう直接指導をしたことを，お告げという形式で示さざるを得ない状況にあったことが窺われる。併せて，「護法の独裁的行動について尋ねられ」た時の対応を示していることは，逆に護法の独裁的行動を使嗾・容認していることでもある。

③ DS・NKの５月４日（戊辰の年３月15日）のお告げで，至尊は「師は九重台と協天台は力を併せねばならない」と厳かに命じた。すなわち，「聞いてください。タック！お兄さん（チュン）と一緒に週治（Chau Tri）に[19]署名しなければいけないよ。クゥー！しばらく苦しむ覚悟が必要です。（中略）子供であるチュンとクゥーは，師と教えの世話をすることに同意する必要があります。」とあり，九重台頭師と協天台護法と上品が一緒に諭されて，師や教えの世話をしていくことが師の意向とされている。

④ ST・NKの５月23日（戊辰の年４月５日）の清心才女（Thanh Tâm Tài Nữ）のお告げで，「協天台職色の重要な任務」を説いている。すなわち，「協天台は，誰もが誰かを助けるために教えにいる人々に任務を遂行させ，（助けを必要としている）人々を見つけさせます。非仏教徒は正しい道に入るだけで，特に権利はありません。誰もが，信者さえ平等です。ただ九重台に籍を置くことはありません。何をすべきかについて協天台の側から判断すると，それは正しい至尊の場所を保つということです。（中略）至尊は協天台の職色を設置し，教えを開き，教えを導く，教えを価値あるものにして，人を助ける。彼らの義務を果たし，不信者を目覚めさせるように，正しい道を示す。」とある。何が正しいかは不詳である。

⑤ DS・NKの６月24日（戊辰の年５月７日）のお告げで，李太白は「わしが教宗権を持っていることができるのは，行政のできる分別

を持った新しい諸道友に寄りかかっているおかげでもある。」と述べている。すなわち,「九重台には何の権利もないし，協天台は命令もしない。ただ，精神をすべて注ぎ込んだとしても何もしなかった。だったら，老師より賢者に全力で交渉させたほうがいい，師に頼めない限りは仕方がないのでは。」としている。行政のできる分別を持った新しい諸道友とは九重台職色とは限らない点が悩ましいが，太白は教えの責任者である教宗であるにも拘らず，九重台には何の権利もないし，協天台は命令もしないと言い切って，賢者に交渉させたほうが良いとしている。

⑥ ST・NKの戊辰の年７月に保法（Bảo Pháp）と賢法（Hiền Pháp）による扶鸞によるお告げで,「十二時君（Thập nhị Thời Quân）の天命」について教えている。すなわち,「保法氏は九重台について不平を言った。協天台の権限を認めることを拒否した。（中略）自分は愚か者よりも優れていると考え，彼らの思いやりを団結させましょう。衆生を導き，恨みを抱けば教えを壊すことになります。子供達のために，暗闇を導くトーチに火をつける責任があります。」と教え導く者としての責務を諭している。

⑦ NKの10月２日（戊辰の年８月19日）のお告げで,「誰が誓いを破って五雷（Ngũ Lôi）を誅滅したのか。師は九重台と協天台は協力し合わねばならない。」と諭した。すなわち,「私は教えのために彼ら（子供たち）の信仰を支えるよう努めています。師は子供たちを理解していますか？私は弟や妹の世話をよくします。(中略)師に従うことをお勧めします。この仕事は，今日で終わりだと思っていました。使用済みですので, これからはお子様(信徒）もお断りさせて頂きます。ハウ（Hậu), ドゥク（Đức), ギァ（Nghĩa), チャン（Trang）の４人の弟子が師の話を聞こうとしています。チュンそれはあなたのせいではありません。」と諭している。ハウ, ドゥク, ギァ, チャンの４人は仙道扶機道士で協天台に属してる。７月21日のコォ・ブット停止命令が出されてコォ・ブットが行われなくなり，手伝いもいらなくなったことから使用済みと思い，信徒の世話もやこうとしないことを公言するあり様は，職色としての主体性や法に関する十二時君[20]としての責任の自覚の欠片も見られず，当時の協天台職色の意識と組織の混乱と退廃の様子を窺わせる。

⑧ NKの10月26日（戊辰の年９月13日）に保法-憲法(Hiến Pháp)が扶鸞を行った降霊会で,「協天台が九重台を訴えた訴状について」とのお告げが降された。すなわち,「ハウ, ギア, チャン，３人は師を怒っているのか」と名指しで３人の師に対する弁解を記している。チャンの弁解では,「師は教えを愛しているので，子供たちを戒めます。いまだに苦しみの絶えないこの世の一員として衆生を哀れみ，慈悲の心から救済する。もしそうでなければ, この世は依然として暗黒の範囲にあり，形すら明らかでない境遇を脱け出すよう強く願うこともない。師は子供たちの利益のためにじっと我慢して，師が来るのを待っています。子供たちは慈悲の心のために，教えの組織を守るべきです。師はここに来て，子供たちにお互いに愛情深くあるよう戒めました。子供たちの中には，師に対して戒律を犯す者もいます。だから，師は不平には我慢しています。子供たちは師から学ぼうとします。」とし，ハウの弁解では,「九重台の起訴状を読んで下さい。師は子どもたちに耳を傾けます。」として師の対応を描写している。すなわち,「笑，言葉もいいけど，面倒な言葉もたくさんある。」だから，師は誰にも教えをあきらめないと主張していると聞きました。では,「私たちはもはや教えに執着していません」という句はどういう意味ですか?師は尋ねました。「では，使われていない法律などあるのでしょうか。誰かが間違っているなら，衆生に過ちを分からせるために間違った

者を連れ出してください。全ての九重台聖会や子供たちが過ちを犯しているとすべきではありません。もしそうなら，李白もそれに関与していますか？……師が子供たちよりよく知っていること。師は博愛の心を持つよう子供たちに諭します。師は，そのために賢明な人が高低を区別しやすいようにしました。そうでなければ，今のあなたはありません。しかし，彼らの過ちは師が正すことです。子供たちは教えのため衆生のために重要です。師もその理由のために彼らを責める心はありません。結局は正邪は衆生がはっきりとさせるでしょう。師はハウを信頼しています。子供たちは師を尊び，九重台に委ねる前に，師に見せるために奉じたものとは別の訴状を作るでしょう。師は太白にその訴状を持ってくるよう諭しました。」とある。続いて,「雪解け，師は子供たちに命じて，ついでに承認できるようにここで聞くようにしました。わかったかな？……師は教えの律は三教の座にあると言った。……俺とドゥクはお告げに不満がある。神，聖，仙，の諸氏が傍聴しているために，子供たちは訴状を書くために腰を下ろしたときに，師に無作法な言葉が少なからずあるのではないかと心配して師を怒らせるようなことがあってはいけないと，一寸教えに良い印象を与えるために，師が諭すまで大変清らかにせねばならないことを子供たちは覚えています。子供たちは師の命令にしっかりと従い，教えはとても幸運です。師は子供たちに恩恵を施します。」と述べて，協天台の訴状を認めたのが仙道扶機道人であったハウ，ギア，チャンの３人であることが知れる。その３人の弁解を聞いたうえで，諭し，九重台に渡す前に訴状を書き直させて事なきを得たようだが，不満の中心は護法の掌握管轄する３人の職色であるこの仙道扶機道人であった十二時君にあり，信徒の修養が進まない状態の責任を九重台に転嫁して訴状提出に及んだものと思われる。協天台職色内部は，統制がなきに等しい状況にあったことを物語っている。

⑨　NKの10月29日（戊辰の年９月17日）にグゥエン・チュン・ハウ（Nguyễn Trung Hậu）とチュオン・フゥ・ドゥック（Trương Hữu Đức）が扶鸞を担った降霊会が行われ，「訴状を至尊に捧げた。」とのお告げが降された。すなわち，「子供たちは師に聞いていただくために訴状を読み上げた。李白は（訴状を）受け取ることに同意しなかったが，師はそうせざるを得なかった。子供たちは師の意向を理解しないで，子供たちの穏やかで礼儀にかなった表情を失ってまで訴状を作成したことを伝えた。（中略）今日，師は子供たちに，慈和の徳性を何度も学習することに務め，時に鍛えるよう戒めた。だからトゥオイ（Tươi）が訴状を再び取り，それを天盤（Thiên bàn）の間に持ってきて，拝んだ後，師は古法（Cổ Pháp）の事について厳かに諭し，この機会に乗じて尚頭師（Thượng Đầu Sư）を叱責した。」と述べている。教宗である李太白が受理を拒んでいる協天台から出された訴状を，師が敢えて受け取って応え，直接処理せざるを得ないという点で，すでに教団崩壊の危機を意味している。トゥオイは十二時君の尚品の下の憲道であり，尚頭師はレェ・ヴァン・チュンの事である。師が古法を説いて，九重台頭師を叱責してようやく訴状を収めさせたものの，先の訴状書き直しのお告げから３日しかたっていないことは，協天台と九重台の対立の根深さを窺わせて余りある。

4　聖座建設問題に関するお告げ

聖地・聖座建設に関わる問題は1926年に始まる[21]。ただ，DSの「カオ上品の教えを行う上での苦心」によると，仏祖の骨（仏舎利）を聖地として購入した土地に移す作業が８時間に及び，購入した土地に残された牛小屋に暮らしながらジャングルの開拓と聖座建設の作業に当たったカオ・クィン・クゥの苦心が細かく綴ら

れている。ただ，土地の購入は1927年に２月23日には済み，３月23日には覚海和尚（Giác Hải Hoà Thượng）[22]に寺を返している。すると，タイニン聖座が暫定的に完成する1932年までの間，何処が教団の中心地であったのかが定かではない。

① ST・NKの１月27日（戊辰の年１月５日）のチョ・ロンでの「師は聖座で仕事をするであろう。」とのお告げに，「聖座がこの場所に来て，誰が参加しなければならないのか?来られないなら師の名を唱えて奉納する誠実な心だけで十分です。一部の場合多くの人が来るので，儀式を厳粛に見せてください。」とあり，暫定的にチョ・ロンに移されたものと想われる。

② DS・ST・TNの４月の日時不詳の護法と上品が扶鸞を担った降霊会でのお告げで，「至尊はカオ上品の治病ために断食を教えた。」とあり，カオ・クィン・クゥが病気で，師が絶食して朝日が昇ったばかりの早朝の空気を腹いっぱい吸うよう教えたことが知れる。

③ NKの９月１日（戊辰の年７月25日）に，カオ上品のタイニン聖座追放事件が記されている。すなわち，「サイゴンからトゥ・マット（Tư Mắt）・グループがタイニン聖座にカオ上品を暴力的に追放しようと押しかけ，上品は聖座を脱出した。」との題の下で事件の全容が記されている。すなわち，「戊辰の年の３月初めに入る前に，数人の九重台職色が聖会に陳情書を送り，上品が聖会の金銭を不正な手段で乱用していると訴えた。教会が調査している間，その数人がサイゴンのトゥ・マット氏に会いに来て，トゥ・マット氏を苛立たせるために理に悖ったさまざまなことを捏造して話した。というのは，トゥ・マットは正直で率直だが浅はかで直にかっとなってよく無鉄砲なことをする性格であることを知っていたので，彼らの陣営にトゥ・マット氏を引き寄せるためであった。友人を集めてトゥ・マット氏のグループはトゥ・ドゥックで組織を作り上げ，その後カオ上品の弊害を問いただすためにタイニン聖座に一緒に誘い合って押しかけることを約束した。彼らはタイニン聖座に至るや，威張って一方的に彼らのやりたいことを誰の許可もなく，いかなる法律に基づくこともなく，何でも行った。この後に知りえたことだが，外側ではタイニンにおけるフランス政権にそそのかされ，内側では正配師（Chánh Phối Sư）トゥオン・トゥオン・タン（Thượng Tương Thanh）とゴック・チャン・タン（Ngọc Trang Thanh）の二人の暗黙の擁護を得ていた。彼らはこのことを検討するために，当時聖座に出席していた各職色を集めること（いわゆる聖会集会）を要求した。その場にいた職色の総数は45名で，当然のことながらこの数字の中には彼らも入っており，彼らと同じ派閥の職色も少なからずいた。彼らは上品と護法を指名して流罪に処した。それは，九重台には仕事をするのに十分な九院（Cửu Viện）があり，さらに協天台にも教えを開く最初の時期にはコォ（お告げ）（cơ）を扶ける仕事があったが，現在至尊はコォ・ブットを禁じておられる。それゆえ協天台職色の任務は尽き，安静に休んでいなければならないからである。彼らは投票を組織し，上品は聖座を離れて自分の家に戻り休むことに賛成の者27票，反対の者15票，白票が３票であった。彼らはこのように民主的な外見を装い巧みに世論を欺いた。というのは，投票の過半数は彼らの派閥に属し，この集会は聖会によって召集されたものではないからです。（残された資料にこの45名の職色の名前も記されてはいない。）このようにしてカオ上品とフゥオン・ヒェウ女史は24時間以内に聖座から離れるよう迫られ，トゥ・マット氏は，もし従わないで聖座から出ることを承知しないなら木の根に縛り上げて放置すると脅した。そのように彼らは，何の法的根拠もなく，後方での横暴な擁護権を頼るだけで，上品が聖座を出るよう追いやるために暴力を

用いた。この件でも尚正配師トゥオン・トゥオン・タンの意見などあるはずもなく，同氏がきわめて多くの野心的な権力を持っており，トゥ・マット氏が同氏の弟子であるがためです。護法は次のように述べています。白票３票を反対票15票に加えても，あちらの27票より少ない。15票という数字は協天台の人数です。協天台の職色の数は15位だからです。27という数字は九重台の職色の数です。というのは，９の倍数，倍数３が追加されればどちらの側が増えるかはっきりします。４日後，つまり戊辰の年７月29日カオ上品はフゥオン・ヒェウ女史と一緒に聖座を離れ，ヒェップ・ニン村（làng Hiệp Ninh）にある上品の自宅に戻るための準備をした。その後，護法もトゥ・ドゥック聖室に難を避けねばならなかった。この聖室は太正配師タイ・トォ・タン(Thái Chánh Phôi Sư Thái Thơ Thanh)によって設立された。個々で，幾人かの教えの心に悖る方が護法を落胆した者のように侮っているように見え，護法は憂鬱な感興を詩に著して記念としました。（中略）カオ上品はあまりにも怒りが胸に溢れ悩み苦しみ精神病になってしまった。実際のところは間違いなく「教えを憂える人はいくらも居らず，道を壊す人は大勢居り，至高の教えを排斥し，至高の魔が打ち据える。至高の教えは打ち据えられ，何時も魔が頭目だ。」との句の通りだ。上品は地位を退き，茅屋を自宅として病に伏せた。上品は自らの境遇を嘆く詩を創った。」とある。タイニン聖座建設問題は，協天台と九重台の対立問題であり，教団指導部の権力争いと知れる。トゥ・マット氏は丙寅の年１～２月に得度した教団創設前からのメンバーではある[23]が利用されただけであろうとの記述は信憑性があり，聖会の公金を乱用しているとの疑いは，タイニン聖座の広域な土地購入費やジャングル開拓のための多くの人夫を雇う経費や，建設資材を必要としたことから生じた疑義で，予算化や建設資金の蓄積を待っての聖地・聖座建設ではなく，寺の返却期限を過ぎての要求に応えるために，信徒の寄付に頼った無計画な聖座建設であった。そのためにかえって不透明で，建設責任者であったカオ上品への疑念を生じさせたのではないかと想われる。実際は，カオ・クィン・クゥは大変多くの私財を寄付しており，タイニン聖座の広域な土地購入の代金もその一部である[24]。それでも足らずに自ら人夫頭となり体を壊すまで開拓にいそしんだ至誠の人であり，それだけに，トゥ・マット氏による追放事件は大きなショックであり，精神的な打撃は大きかったものと思われる。奇異に思われることは，このような暴力事件が発生し，黒幕として九重台正配師トゥオン・トゥオン・タンとゴック・チャン・タンの実名まで出ていながら，教団がしっかりとした調査をして，三教の座等で司法の判断を下していないことである。また，この事件が起こった日時も定かではない。NKの９月１日（戊辰の年７月25日）の文の中に，七娘がカオ上品の居るあばら家を草舎賢宮（Thảo Xá Hiền Cung）と名付け，対聯を贈っている。それを贈った日が７月28日（戊辰の年６月12日）であることから，４月の絶食指導以後の７月28日までの間の事と推察される。

④　NKの10月１日（戊辰の年８月18日）に「護法は難を避けるためにトゥ・ドゥック聖室に下り，その後フゥ・ミィ（PhúMỹ）に行ってミン・ティエン・ダン（Minh Thiện Đàn明善壇）で教えを諭した。」との記述がある。護法がトゥ・ドゥック聖室に下って難を避けている時，ミィ・トォ（Mỹ Tho）のフゥ・ミィ村に明善壇グループが居り，ちょうどトゥ・ドゥックに居た護法に連絡して訪問した。このグループには，レェ・ヴァン・チュン（フゥ・ミィ）[25](Lê Văn Trung（Phú Mỹ)，フゥイン・ヴァン・フゥオン（Huỳnh Văn Phuông)，ハム・スン（Hàm Sung)，ミン（Minh）氏，フゥ（Phú）氏が居た。この五氏がトゥ・ドゥック聖室に

８日間滞在し，護法から病を取り除く許可を得た。というのは，この年は下痢をする疫病が蔓延していたからである。トゥオン・ミン・タン（Thượng Minh Thanh）教友はよく連絡してこられ，護法に許されて，教友のためにフゥ・ミィに戻り本道の病を取り除くことを神に伝えた。２か月後に護法を儀礼を設けて歓迎する準備のためにフゥ・ミィに戻ることを護法は許し，また，護法が２か月後にフゥ・ミィに行くことを承知した。」とあり，1927年からの護法と明善壇との経緯を紹介している。その中で，1927年11月18日（丁卯の年10月14日）にディン・コン・チュ（Đinh Công Trứ[26]）氏がコォ（お告げ）を執った時に，李教宗が降って，氏の家に明善壇を設けるよう諭し，チュ氏の家の近くに居たレェ・ヴァン・チュン（フゥ・ミィ）も明善壇に加入した。この二氏は明善壇の正式な扶鸞を執り行い李教宗を降すことができた。1928年２月６日（戊辰の年１月15日）コォ（お告げ）を求める壇が設けられて明善壇に入るそれぞれの人が誓いを立てトゥオン・ミン・タン教友が壇を照覧し，頭師トゥオン・チュン・ニュット，護法，上品の３氏のいる聖座にまとめて捧げられた。明善壇も壇に加わった人を聖座に連れていくよう命じられ，上品の命令に従って密林の土地開拓の仕事に従事し，フゥ・ミィ事務所と言われた７部屋ある家を建てた。ことなどが記されている。

興味深いことに，1929年２月25日（己巳の年１月16日）の李教宗が降したお告げに「明善は帰天であり，帰天は范門である。それゆえ護法と協力せねばならない。」と諭していることである。明善壇の信徒がカオダイ教団に取り込まれていく経緯が知れる。

⑤　NKの11月26日（戊辰の年10月15日）に「聖会はカオ上品が浄室に入るよう勧めた。」とあり，心を病んだ上品への配慮を見せた。というのは，「草舎賢宮に戻ったその日から，上品は疲れ果て，痩せた体，悲しげな顔をしていた。上品は鬱病に苦しんでいた。」上品と共に聖地開拓・聖座建設事業に関わり人夫へのお粥の差し入れなどを行って身近で上品の苦労を見てきたフゥオン・ヒィエウは，1927年の苦労を中心に「カオ上品の教えを行う上での苦心[27]」を，1928年の苦労は「カオ上品と女性頭師フゥオン・ヒィエウの教えを行う上での苦心」に，更に上品の草舎賢宮での様子については「カオ上品の状態」で詳細に記している。聖会は上品のために浄室を設けた上で式典を以て，上品を迎え入れたが，病気は改善せず，毎日睡眠不足になり，疲れ果てたように見えたので，12月26日に再び草舎賢宮に戻ったことが記されている。ただ，カオ・クィン・クゥは翌1929年３月１日には帰らぬ人となった。

5　コォ・ブット停止命令に関するお告げ

コォ・ブット（Cơ Bút）停止命令は。1927年６月１日のお告げに始まり，教団内組織の不和を齎す一因となった。この問題が1928年に持ち越されて波紋を広げている。

①　NKの１月初頭（丁卯の年年末）の「師はコォ・ブットと十二時君（Thập nhị Thời Quân）について諭した。」と題する記述の中で，師はこの聖言の中では，重要な２つの事を覚えておきなさいとして，一つは「十二時君はそれぞれ割り当てられている。もし幾人かの者が師の定めた扶鸞とは異なるものを行ったなら，そのコォ・ブットは，師の述べた言葉では全くない。子供たちは注意深く予防せねばならない」。二つ目は「子供たちが真聖な段階にあっても俗世で生きねばならず，もし未だ信じるに足らない人々を手を引いて導くために，性質が十分でないなら，師が教えを伝えるために筆を執ることを禁止するに値する。」と諭している。要は，一つはコォ・ブットをしてよいのは協天台の十二時君以上の霊媒だけで，他のコォ・ブットは師の教えではない。二つ目は，余り信じていな

い者まで教えに導くためにコォ・ブットをしてはいけないということと解される。

② NKの２月３日（戊辰の年１月12日）のお告げで，師は「中途半端なコォ（お告げ）を求めることをしないように。」と禁じられた。すなわち，「チュン，トォ，カ，これからはお互いにどんなことでも教えの争いごとを調停し，聖意による新律に従って諸道友と心を一つに合わせ，教えの利益を補い，子供たちがお互いに落ち着いて考慮できるよう，施行しなさい。そうすれば，（コォを設けて）問を求めることを俟つ必要もないでしょう。各子供たちはお互いに信頼し，お互いに導きあい，お互いに励ましあい，処世に従ってお互いに疑うことも忘れています。それは師のもっとも偉大で楽しく愉快な子供たちの基本の掟です。心を変える反逆者については，天の言葉の律もそれにふさわしい方法で懲らしめて諭すであろう。」と記している。教えの争いごとのたびにコォ・ブットを設けて神意を窺うことを中途半端なコォ（お告げ）と称したことが知れる。

③ TN・NKの６月22日（戊辰の年５月５日）の「誰も通りを歩いたり，畑を耕してはいない。誰も教えを認識していない。」とのお告げで，教えの種がまかれて２年たつが，誰も教えを認識していない。誰も心の畑を耕作していないので，刈取りすることはできず，魂を失うでしょうとし，それをNKでは「試練のコォ（お告げ）は，聖なる性質と共に普通の粗野な心を併せ持った者に対してだけ用いられる」と述べている。

④ DS・ST・NKの７月６日（戊辰の年５月19日）の「至尊は教えが混乱状態にある理由を理解していますか?と諭された。」とのお告げで，頭師のチュンと教宗の太白に対し，「師（私）は以前に子であるあなたを罪で告発したことはありませんが，神・聖人・仙人・仏陀は次のことをはっきりと認識されています。この俗世で師がタックに神聖な公平の天秤を与えたのと同じように，師は子であるあなたに賞罰を与える権限を手渡しました。しかし，どちらも，一方は弱く，他方はぼうっとしています。それを理解するために子供であるあなたに何も言う必要はないと師は思いました。諸神等の方々は大変ご不満です。」と。その上で最後に，「タック！このまま無駄にし続けるつもりですか？師が子であるあなたに与えたどのようなことも，子であるあなたが達成していません。チュン･太白……ええ，子であるあなたも，まだまだ呼吸を知らねばなりません。」と護法のタックと九重台頭師チュン，それに教宗李太白まで加えて教団指導者と認めた上で，叱責と思える厳しい評価をお告げという形式で降している。バ・リアで行われたことに関わりがあるのかは不詳であるが，教団トップへの師の不満が表明されることは，師が自身の神聖に不満を述べるに等しく異様であるが，反面人間的であると思われる。

⑤ NKの７月21日（戊辰の年６月５日）に保法と憲法が担った扶鸞において，「扶鸞において，コォ・ブットを一時的に停止することを皆さんに命令します。」と関聖（QuanThánh）によるお告げが降された。すなわち，「慈悲の方はもはや何もおっしゃらないが，教えは道友たちに師の命令を諭す。しかし，師の門弟たちはお互いに奪い取ろうとしており，教えは乱れた糸のようであると道友たちに伝えた。（中略）教えのために，責務のために諸道友に忠告してください。一緒に心配して個人的な不平で憤るべきではありません。そうしたら教えを失ってしまいます。大変長い時間をかけてやってきた事業は，一時の憤りのために，散り散りになってしまうでしょう。」とある。慈悲の方が至尊であることは言うまでもないが，打開策もなく関聖を登場させてコォ・ブット停止命令を伝えさせるというレトリックや拗ねた至尊を至上の神と仰ぐ道友や聖霊に人間的な感興を感じさせる。この日

以降のお告げは師が直接コォ（お告げ）に降ることは多少少なくなり，代わりに李白や諸々の聖霊の登場する機会が増えるものの，それも長続きしない。

6　戒律・経典に関するお告げ

戒律や経典整備問題も前年の『法正伝』，『新律』に続く継続的な課題の一つである。教団内の多様な修養のあり方や解釈による混乱を収拾するためにも，ルールの確立やマニュアル化が求められたものと思われる。

① NKの３月20日（戊辰の年２月29日）のお告げで，「トゥオン・チュン・ニュット（Thượng Trung Nhựt）頭師が各職色・職事・道友の基準とするための『行動方針』（Phương Châm Hành Đạo）という小冊子を出した。」とある。すなわち，「これまで一つ一つを文に書いては来なかった。冊子にしなかったわけは，重い責任を思ってのことであるが，両派男女の諸道友が心を一つにして決まりに従って教えを遂行し，教えのためにも幸いでもあり，私の多くの点でも幸いなこととなるよう待ち望み，この『行動方針』を簡単に記録しなければならないと思った所以である。」との事である。この20頁の小冊子の内容は８つある。ⅰ.教えを守る（謙譲・忍耐・和合・堅心・清廉の徳行を磨く）。ⅱ.教えのうちの人をどのようにもてなさねばならないのか。ⅲ.教えの外の人に対する対応。ⅳ.普通天道（天の教えを広く普及する；説道・開壇）。ⅴ.倦まず弛まず壇に仕えねばならない。ⅵ.壇に仕える規則（壇に入る時）。ⅶ.経書・律令をみねばならない。ⅷ.どのような経書をみねばならないか。このほかに1928年に頭師ゴック・リック・グゥエット(Ngọc Lịch Nguyệt)が編纂した『四時日誦経』（Từ Thời Nhứt Tụng Kinh）と合本させている。ルールの明確化でありマニュアル化の一つと思われる。

② NKの６月13日（戊辰の年４月26日）に，「教えに属する人が出版する経書は，聖会の検閲委員会に提出せねばならない。」と，尚頭師レェ・ヴァン・チュンの名で文書が出された。すなわち，「書物を送り出す前に，我々は作家の方々にお願いして，教えの律に従って聖会が検閲するために喜んで提出してもらいます。教えの中で経書を普及するために聖会での検閲委員会が観る主な点は，国事を犯していないか，しきたりを壊していないか，全ての人の生活を阻害していないか，大道三期普度の宗旨に反していないか，個人に反駁し別の宗教にまで違反していないかという点です。」とある。検閲しなければならない経書が出回り始めた[28]ことを意味していると思われる。

③ NKの８月28日（戊辰の年７月14日）に「憲法綱領（Chương Trình Hiến Pháp）を公布施行するための議事録」とある。すなわち，「李教宗が配師タイ・カ・タン（Thái Ca Thanh）に憲法綱領を設けることを委ね，同日が聖会の召集する中元節の礼（Lễ Trung Nguyễn）に当たっているので，同議事録に署名していただくのに（都合が）よいとした。」とあり，憲法綱領に署名した章法チャン・ダオ・クゥアン（Trần Đạo Quang）以下19名が署名している。憲法綱領の全文は記されていないので不詳だが第22～24条は，「何人も検閲委員会の許可なく大道三期普度の名や天恩，天眼の図像を使用してはならない」としたものなどである。憲法綱領の施行はトゥオン・チュン・ニュットの下で進められ，規律の文章化による管理が進んでいることが窺える。

④ NKの12月12日（戊辰の年11月１日）に，「プノンペンの外交聖会長の週治４には頭師トゥオン・チュン・ニュットが検証し採択したものである」として，同日付の週治４の全文が記されている。その性格は「各小聖室の天封の方々や職事が従うことによって教えを行い信徒を諭し戒めるための布告文書」とあり，「聖室や小聖室にあっては，日々律令が定めたそれぞれの時間に従って毎日四つの時に礼

拝を行わねばならない。」と記したうえで，入門に際しての儀式や16項目に及ぶ入門後の細かい留意事項が記されており，違反した場合を想定し，４か条にわたる懲罰規定まで記されている。この文書の作成者はプノンペン聖会正会長教友トゥオン・バイ・タン（Thượng Bảy Thanh）とあるが，それを承認するように協天台接道（Tiếp Đạo）カオ・ドゥック・チョン（Cao Đức Trọng）と，聖座において検証と採択1929年３月24日頭師トゥオン・チュン・ニュットと記されている。一つ一つの理は分かるが，絹の衣服を使用しただけで懲罰というのは行き過ぎたマニュアル化で，信徒たちは息が詰まるのではと想われる。

⑤　DSの日時不詳の護法と上品が扶鸞を担ったお告げに，「至尊は五戒の禁（Ngũ Giới Cấm）を諭した。」とあり，TNの同じく日時不詳のお告げには，「至尊の聖なる教えは，不殺生（Bất sát sanh）（禁戒）について話された。」，「至尊の聖なる教えは，不偸盗（Bất Du Đạo）（禁戒）について話された。」，「至尊の聖なる教えは，不妄語（Bất Vọng ngữ）（禁戒）について話された。」と３つに分けて記されている。前年の不飲酒戒に関するお告げ[29]と併せて考察する必要があろうと思われるが，TNの第２巻1970年版には不邪淫（Bất Tà Dâm）と不飲酒（Bất Ẩm T ửu）については第１巻に記載されており第２巻には記載がない。1972年版以降に五戒が揃って記載されるようになった。改めて五戒の禁を至尊が述べなければならなかった状況にあったものと思われる。

7　その他のことに関するお告げ

①　NKの１月５日（丁卯の年12月13日）プノンペンにおいて，「月心真人（Nguyệt Tâm Chơn Nhơn）が外交聖会職色を諭すコォ（お告げ）を降した。」とある。興味深い点は，このお告げの中で，「コォ・ブット！護法は大変注意されている。コォ・ブットは教えを損ない傷つけ，害となりえる。それだから，教えはどんなところでも，コォ（お告げ）を降すわけではない。もし誰かが教えの名を借りるなら，人と合わせることになるだろう。護法よ！これより死ぬまで九重台が教えを行う方法を考慮するために，護法はただ律令に関して処断することだけを心配し，何も助けてはいけないし，また前日にはすでに接道に権限を渡した。」とある。１月５日のお告げであることを考えると，1927年のコォ・ブット停止命令からの経緯を受けての護法の判断が視られ，週知４との関連も窺わせるが，外教聖会という護法肝いりの組織ゆえのこととも思われる。

②　ST・NKの１月７日（丁卯の年12月15日）のお告げに「李教宗が，保生君（Bảo Sanh Quân）の道服を諭した。」とある。すなわち，十二時君の一人である保生君に封じられたレ・ヴァン・ホァック（Lê Văn Hoạch（1896–1978））に対して天服を縫うべきとして帽子の細かな刺繍にまで言及している。その上で，「教えがゆっくりと進んでいるのは，教えを行う者のためで天意によるものではない。もし誤りを知っていて早く修正しないなら，教えは崩れねばならないであろう。教えを行う者は公共の者ではありませんし，煩悩から解き放つことのできる救済を願っているわけでもありません。分かっていますよね。」と述べている。教えを行う者は，煩悩から解き放つことのできる救済を願っているわけではないと言い切る李太白教宗の言葉には，驚く。よし実態が救済を求めていないとしても，それを教宗が保生君の就任祝福のお告げの中で口にすること自体理解に苦しむ。

③　NKの４月16日（戊辰の年２月26日）のお告げで，同日のTNの「至尊は，肩書に関係なく，全ての弟子を平等に扱ってきた。」というお告げの他に，天封の職を手にしながら我慢して教えを行っていないと九重台職色の落ち度を護法が叱責したことに李教宗が応え

るというお告げである。すなわち,「護法,賢友の皆さん！聞いてください。協天台側の賢友の方々は，まるで犯罪者のように見ているが，わしはわしの九重台をいささかも庇おうなどと思ってもいない。それは，賢友がどのような権力によってわしを責めるのか。曖昧なためにわしの各職色はこの言葉をよく聞きなさい。賢友が神前で燃やす祭文の中に名前を挙げている多くの者についてわしは厭きるほど知っており，賢友は彼らのために用意した刑罰を時たま視るであろう。タイ・ビン・タン（Thái Bính Thanh）よ,賢友はトゥオン・チュン・ニュットにも次のように言った。「九重台が協天台を認める日までに，わしは人々のために全ての教宗の権を譲り渡す」と，わしはまさしく行うであろう。」とある。協天台と九重台の対立が，遂には護法の九重台職色に対する叱責から，李教宗の引責辞任を惹起し，次期教宗にトゥオン・チュン・ニュットが名指しされている。至尊の人事権の侵害と思われるが，お告げという形式の中で示されていることから，ある種の内示とも解し得るし，霊媒であった者の潜在意識の表出したものとも解される。

④　ST・NKの５月５日（戊辰の年３月16日）の（STによれば護法と上品が大玉機の扶けを借りて，二人の頭師と九重台職色の参加の下,聖座で行った扶鸞で降された）お告げで,「師は，護法が速やかに浄室を創り終えるよう諭した。」とある。そのお告げに付された解説の最後に,「至尊は，上品の心の中にため込んだ憤りをはっきりと知っており，また師が非道な者という（九重台職色の）何人かの腹黒い目的もはっきりと知っている。」だから至尊は上述の聖言の中で議論したように述べた，次の句がある。「クゥ！あなたはあなたの証拠を用意しておかねばなりません。そして聖会に非道の者を戒めることのできる知識を聖会に説明して下さい。」とある。このお告げが５月５日ということは，その時点で，至尊が上品追放事件を知っていたことを意味している。ということは同事件の発生は５月５日以前であり上品の精神的な痛手も知っていたが故に浄室の整備を急がせたものと推察される。

⑤　NKの７月７日（戊辰の年５月20日），福善（Phước Thiện）において，師が約束した言葉を守るために師の言いつけで，李教宗はヴァンルベルト（Vintrebert）氏にフランス語で教えを降している。ただ，説明の途中で「多くの人が読むという理由のために，これ以上更に書き加えることはできません。」と中断してしまっていて，多くの人に読まれて困る内容とは何を指しているのかが定かでない。また，多くの人の中にフランス植民地政庁の関係者を含むと言いたいのかも定かでない。

⑥　NKの８月24日（戊辰の年７月10日）に,「保法の職にある者が護法の権力乱用に不満を述べた。」と李太白が諭したお告げがあった。すなわち,「もし子供たちが上がるなら，タックを用い，タックに頼る，その時どこか越権行為をする境遇になる。だから，子供たちはやむを得ずそうしているのではないのか？誰もそんなことに気を配る必要はないし，教えに対する誠心さえあれば仕事も誠のものである。子供たちの意に従えば，何をせねばならないのであろうか？どのような徳も無用なのでは？至尊とわしはいつも次のように説明してきた。すなわち,「教えを行う知者は固有の真理を知っており，それを拠り所にして真理に従っており，一向に間違ってもかまわない。」と。「しかし，子供たちや諸道友がこの条の教えを願うのであれば，扶鸞の責任を引き受けるどのような名の者であれ，またそれをよりどころに従う者に至るまで至尊に合わせて願うがよい。これからその時まで，それでも一緒に知り，教えを行うのです。ミン・チャン（Minh Chánh）[30]に尋ねれば，はっきりするでしょう。子供たちは，まだこの名前は知りませんね。ミン・リ（Minh Lý）側の

人です。」と述べている。李教宗の恨みは深いようで，護法ファム・コン・タックの越権行為を保法を使ってお告げという形式で，喧伝しているが，子供たちや諸道友をどう読むかで，解釈が変わるような曖昧な表現となっている。

⑦ NKの９月（戊辰の年８月中旬）のお告げに「護法は范業（Phạm Nghiệp）を建てるための土地を購入した。」とある。すなわち,「護法の個人的資金を用いて，ゴー・ケン寺の近くの国道22号沿いの土地の一部を購入した。師はレェ・サン（Lễ Sanh）のトゥオン・グォン・タン（Thượng Ngươn Thanh）に木材で家を建てるよう請け負わせ・・・」とあり，家が完成した後，護法がみずから門を作りその門に「范業」と記した看板を掲げた。護法に教えを学ぶために護法に近づきたい意図で氏を手伝おうとする道心（Đạo Tâm）が毎日少なくなく，これが後に護法が「范門（Phạm Môn）」を立てたことにつながるとしている。護法が，教えに関して多くの道心からの信頼を得ていたことが窺える。

⑧ ST・NKの11月30日（戊辰の年10月19日）に護法と保法とが担った扶鸞において，保道（Bảo Đạo）カ・ミン・チュオン（Ca Minh Chương）が登仙し，師がカ保道のために搭を建てるよう諭した。」とある。齢79歳であった。師の長い弔文が寄せられ，護法・協天台掌官と頭師トゥオン・チュン・ニュットが読み上げた。追憶と哀惜のことばが続き,「カ・ミン・チュオンは至誠の人であった。彼の教訓は人道（Nhơn Đạo）に気を配ることであり，人が天道（Thiên Đạo）に気を配るのに近い。氏は長く斎戒してミン・ス（明師Minh Sư）道の教えを守り,「バ・ニェン・ヴァン・キェップ・ナン・タオ・ゴ（Bá niên vạn kiếp nan tao ngộ播年万劫難遭遇）」という経文を持っていた。この経文は，新しい教えが開かれるのに出会うのは百万劫年の難しさと説いており，カ・ミン・チュオンは有縁有分の方で，ロン・ホア・タム・ホイ（Long Hoa Tam Hội 龍華三会）の天開の時と結ばれていた。丙寅の年，上源の会（Hội Thượng nguơn）で私はクゥ，タックと共にフック・ロック（Phước Lộc）県で聖を祀って普度を行った。この時カ・ミン・チュオンが壇に仕え，大慈悲の方の珠玉の言葉を聞いた。有縁の方は俊敏に聖なる教えの言葉を理解し，そのまますぐに教えを求めて入門した。…」とあり，カ・ミン・チュオンが素はミン・ス道の信奉者であり丙寅の年の一斉布教活動の中で入門した経緯が記されている。入門後，さして経ずに，道友ファム・ヴァン・トゥオイ（Phạm Văn Tươi）と一緒に，多くの地で布教のための扶鸞を行った。

以上８つがその他に属すお告げだが，このカ・ミン・チュオンの逝去とヴァンルベルト氏への教え以外は，共に護法ファム・コン・タックに関する内容となっている。

おわりに

従来のカオダイ教の創生期の研究では，南部地域への組織的な布教活動によりたった１か月で数万の信徒を得たことから，爆発的な発展と評価された[31]。コォ・ブットにより，信徒数は確かに急速に拡大したと思われるが，教団内部の実情は，戒律さえ未だ十分に定まらない中で，入門後の修養体制も確立しておらず，1927年からの混乱が続いた。急増の信徒たちはカオダイ教の教えを体現するための修養を怠り，職色にある者たちも宗務組織である九重台とコォ・ブットを行うための霊媒役の専門組織の協天台が組織的に対立した。コォ・ブット停止命令により協天台職色のやるべき仕事がなくなり，霊媒であるがゆえに至尊を語ることを許されていた職色が，もはやコォ・ブットという方法で至尊を語ることを至尊自身から停止され，休業状態でいざるを得ないはずとの解釈を導き，九重台職色の教団運営へのヘゲモニー奪取への野望に火を付け，組織的対立を招く結果に

なったためである。教えの混乱に警鐘を鳴らした護法が九重台職色を叱責したことから，教宗李太白の不興をかい，挙句の果ては，九重台の指導的立場にある者を背景に，タイニン聖座から暴力的に上品の位にあったカオ・クィン・クゥを追放する事件が起き，護法も避難せざるを得ず，裁きも下されなかった。この事態に，至尊も職色が職位にあってもその本分を果たさず，諭すことを放棄するほどの内部の混乱を招いたのが，1928年のカオダイ教団の実態であったと思われる。それゆえ，レェ・ヴァン・チュンの『行動方針』といった戒律のマニュアル化や『週治４』などに観られるように細かすぎるほどの規制を課す法治主義的な対応が進んだ。

このことは，教団内部の一元的な指導体制が崩壊していた状況を意味する。すなわち,「師は，分裂を喜ばない」というようなお告げが意味する事態が進行していた[32]ことを窺わせる。具体的な分裂の進捗をお告げの中には見出し難く，お告げの中で師が呼びかける対象の具体的な名前も頭文字のアルファベットだけなので，氏名を特定できない。加えて，大道三期普度の名号の承認制度による出版物の事前検閲制度の導入は，検閲を必要とする不都合な文書が出回っていることを示唆している。ただ，1928年段階では，正式に分派がお告げに反映されてはいないので，ゴォ・ヴァン・チュウ（Ngo Van Chieu）を除き分派したグループも教団内の職位にありながら自立化を志向するといった段階にあったものと思われる。

この混乱の中で，教宗李太白が引責辞任を匂わせ，次期教宗職をレェ・ヴァン・チュンに移譲しようとお告げで示唆した結果，レェ・ヴァン・チュンの教宗への台頭を招いた。

＜注＞

⑴・髙津 茂（2020）「カオダイ教団創設期（1926年）のお告げとその解析―大道三期普度教団の創設―」，東洋大学アジア文化研究所『研究年報』2020年 第55号（2021年１月31日発行）pp.63－66
・髙津 茂（2021）「カオダイ教団創設直後（1927年）のお告げとその解析 ―大道三期普度教団の組織等の基礎の確立―」，東洋大学アジア文化研究所『研究年報』2021年 第56号（2022年１月31日発行）pp.78－97

⑵ 髙津 茂（2015）「カオダイ教におけるフォ・ロアンとサイ・バン ―カオダイ教形成過程におけるサイ・バンを中心として―」，『人文学報』第108号，2015，pp.128-135

⑶ 髙津 茂（2020）pp.63-66

⑷ 大道三期普度の名を冠することができるのは，検閲委員会を経て可能となるのであり，この出版物検閲制度が設置されたのは1928年６月13日のお告げの後である。逆に，出版しなければ，手書きの個人の記録した聖言もあり得るということである。

⑸ THÁNH NGÔN SƯU TẬP, 冒頭の「意向」に巻１に使用した７種の出典が詳述されているが，どのお告げがどの出典によるものであるのかは明示されていない。

⑹ 髙津 茂（2021）pp.86-88

⑺ 髙津 茂（2020）pp.58-59，同（2021）pp.79-80

⑻ カオダイ教団がフランス植民地の中で宗教団体として活動するとき，政治的な動きや外交聖会を通した他の社会集団との結びつき等に関する神意を示すお告げは，大道三期普度の名の下での公刊物としては許可されなかった可能性が高いと思われる。

⑼ ここでいう「五支」とは，仏道・仙道・聖道・神道・人道をいう。

⑽ Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ；ĐẠO SỬ, Quyển Ⅱ. Từ năm Ất Sửu（1925）đến năm Kỷ Tỵ（1929），Biên Soạn： Nữ Đầu Sư Hương Hiếu, Do Thánh Thất Tộc Đạo Westminter, Tiểu Bang California,Hoa Kỳ ấn hành năm Ất Hợi（1995），In tại MEKÔNG PRINTING, 2421W. First Street. Santa Ana CA 92703 USA ・「カオ上品の教えを行う上での苦心」（Khổ tâm Hành Đạo của Đức Cao Thượng Phẩm），pp.87-91
・「カオ上品の状態」（Tình trạng Đức Cao Thư

ợng Phẩm),pp.102-103

・「カオ上品と女性頭師フゥオン・ヒィエウの教えを行う上での苦心」(Khổ Tâm Hành Đạo của Đức Cao Thượng Phẩm và Nữ Đầu Sư Hương Hiếu),pp.168-170

・「女性正配師フゥオン・ヒィエウ小史」(Tiểu Sử Bà Chánh Phối Sư Hương Hiếu) Pp.135-147

⑾ 髙津 茂(2021)p.88

⑿ 世界の乾坤の権を握る玉隍上帝の朝廷がある所。(Cao Đài Từ Điên www.caodaism.org)

⒀ 保道(BảoĐạo);カ・ミン・チュオン(Ca Mình Chương)の事と思われる。髙津 茂(2021)p.91

⒁ 聖霊の役割は,髙津 茂(2021)p.82

⒂ 開道の届出書を創設する大会が開かれ,245名が署名した日。髙津 茂(2020)p.70

⒃ 髙津 茂(2019)「1925年におけるカオダイ教サイバン・グループとカオダイ教外教公傳」,東洋大学アジア文化研究所『研究年報』2019年第54号(2020年2月28日発行)pp.106－107

⒄ 髙津 茂(2021)pp.91-92

⒅ 髙津 茂(2021)pp.90-91

⒆ 週治4を指すと思われる。

⒇ 護法の掌管で法に関する4人の十二時君である。髙津 茂(2021)p.91

ハウ＝保法(Bảo Pháp);Nguyễn Trung Hậu

ドゥック＝憲法(Hiến Pháp);Trương Hữu Đức

ギィア＝開法(Khai Pháp);Trần Duy Nghĩa

チャン＝接法(Tiếp Pháp);Trương Văn Tràng

(21) 髙津 茂(2021)pp.85-86

(22) 俗名グゥエン・ヴァン・トゥオン(Nguyễn Văn Tương),法名ティック・トゥ・フォン(Thích Từ Phong)。如眼和尚(Hoà Thượng Như Nhãn)(1864－1939)とも言う。Nguyễn Văn Hồng;Cao Đài Từ Điển www.caodaism.org

(23) 髙津 茂(2020)p.60

なお,トゥ・マット氏については,ST・NKの2月27日に降された「十二時君は護法の命令に従わなければならない」に付けられた注に詳しい。それによると,同氏はガスランプが切れて火事になり焼死し,トゥオン・チュン・ニュットが香典を持参して同氏の妻子を弔った際に,「早くに師に召されたことは,教えの為には幸いであった。」と言ったと記されている。

(24) 髙津 茂(2019)p.99

(25) 同姓同名だが,頭師レェ・ヴァン・チュンとは異なる。

(26) 丁先皇の息子の丁公著(877-940)とは同姓同名だが無関係。

(27) 注⑽参照

(28) 1927年は「聖職協議会」が出版前に承認を与えた。髙津 茂(2021)p.85

(29) 髙津 茂(2021)p.83

(30) 三宗廟(Tam Tông Miếu)明理道(Minh Lý Đạo)前開(Tiền Khai)六位の一人で常にオウ・ミン・チャン(Âu Minh Chánh)と呼ばれたオウ・キェット・ラム(Âu Kiệt Lâm)(1896-1941)氏の道号。

(31) Victor L. Oliver;'Caodai Spiritism', Leiden, 1976, p41

Jayne Susan Werner;'Peasant Politics And Religious Sectarianism:Peasant And Priest In The Cao Dai In Viet Nam, Monograph Series No.23/Yale University Southeast Asia Studies, p4

(32) Cao Đài Vấn Đáp, Nhà Xuất bản Tôn Giáo, 2010, pp.30-32, pp.36-37

(客員研究員)

Abstract

The messages after the founding of the Cao Dai cult (1928) and its analysis:

Conflicts of the organization of Dai Dao Tam Ky Pho Do & Rise of Religion Le Van Trung

TAKATSU Shigeru

This paper analyzes the 49 revelations that were said to have been given by the Holy Spirit of the Cao Dai sect and its subordinates in 1928, and clarifies the characteristics of the Cao Dai sect in the same year. About 1/3 of them have not been able to practice the teachings, and it is close to frustration and reprimand for the fact that the philosophy of the teachings is not been communicated at all. Next, there are many revelations about the conflict between Hiep Thien Dai, a group of spirit mediums, and Cuu Trung Dai, a religious organization. Furthermore, in the issue of the construction of the Holy See, a part of Cuu Trung Dai violently exiled Cao Quynh Cu, who had been working on the construction of the Tay Ninh Holy See, and finally, on July 21st, Co But(Necromancy) was killed as in the previous year. A suspension order was issued, but chaos continued. I think it has become a hotbed of cult split.

Key words: Caodai religion, 3rd stage of the Great Salvational Road, Order to stop Co But(Necromancy), Conflict between Hiep Thiên Thien Dai and Cuu Trung Dai , Expulsion Cao Quynh Que from Holy See